

「み国のしるしはベタニアにある」

主イエス様は、十字架の死から3日後に復活され、40日の間この地上で女性たちや弟子たちと共に過ごされた後、天に昇られました。主の昇天の場面がルカによる福音書に次のように記されています。「イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を挙げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。」(ルカ 24:50-53)

私は主が昇天された後の弟子たちの行動がとても印象深いと思いました。彼らは「大喜びでエルサレムに帰った」のです。お慕い申し上げて一緒に歩んできた主の十字架という残虐で悲惨な絶望的な死を目の当たりにした弟子たちの心はどうだったのでしょうか。聖書によれば彼らはその現実から逃亡し、復活の知らせを女性たちから聴いても信じることができずたわ言のように聞き流し、それぞれの家の中に鍵を閉めて閉じこもっていたのです。弟子たちの心はボロボロだったのではないのでしょうか。そんな彼らに復活された主はそっと寄り添われ、声をかけられ、食事を共にされました。そして、彼らの失われた「日常」を回復されたのです。そして、主は天に昇られました。その時の弟子たちは悲しみにうちひしがれていたのではなく十字架の死の現場であったエルサレムに喜びのうちに、それも「大喜び」で帰っていったのです。彼らをこのような姿まで回復され、そして行動を変容させていったのは一体何だったのでしょうか。私はとても興味深く思います。その答えは聖書にはっきりと記されていました。彼らを絶望の淵から救い喜びの中で生きられるようにしたのは「祝福」でした。主イエスは天に昇られるとき手を挙

げて祝福され、祝福しながら彼らを離れていったのです。弟子たちが肉眼で見た最後の主のお姿は、自分たちを祝福してくださった姿だったのです。彼らは、その後「絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた」(ルカ 24:53)のです。そして、約束の聖霊が降臨するまでの10日間エルサレムのある家の2階に集まって熱心に祈りをささげていたのです。「み国がきますように」と祈ったのです。この世界に、私たちのそれぞれの日常にみ国がきますようにとお祈りいたしましょう。主が天に昇られた場所をはっきりとは聖書には記されてはおりませんが「ベタニアの辺り」であると黙想します。ベタニアはエルサレムに近い場所で主が愛された街で弟子たちとの日常を過ごされた思い出の地です。私はそこから主が弟子たちを祝福しながら天に昇られたことに大きな恵みを感じるのです。私たちにとってのそれぞれの「ベタニア」を主は今も祝福をしてくださっていると信じます。弟子たちが主の祝福を受けてみ国がきますようにと祈り続けたように私たちも主が祝福してくださっていることを心に覚えてみ国の完成を待ち望んで参りましょう。み国のしるしは私たちのベタニアにいつもあるのです。(司祭 越山哲也)

